



Title	詩仙堂に遊ぶ
Author(s)	小沼, 量平
Citation	懐徳. 1924, 1, p. 36-40
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/88692">https://hdl.handle.net/11094/88692</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

た東亞航海圖は故原文學博士、伊勢の角尾七郎次郎氏所藏の圖と共に我國に三葉しかない珍品であつて圖は羊皮の上に胡粉を塗り其上に描かれたものである。

其他末吉家か秀吉より贈與されし金色燦爛、目を奪ふ計りの膳椀、費晴湖十二幅對、それを包んで歸りし更紗、洋紙に書かれし蘭語の單語など思へば何れも海外貿易當時の末吉家を偲ばしむるものばかりであつた

## 詩仙堂に遊ぶ

大正十三年五月廿五日（日曜日）堂友井上正美、岡田玄碩、野口幸雄、小沼量平、平野得三、の五名京都府愛宕郡修學院村に石川丈山先生隱棲の舊廬を訪ふ堂主喜んで一行を迎へ先づ客廳に請じ茶菓を饗じ欸待頗る力む次で各室及び室内に陳列せられたる先生の遺墨其他の寶物を觀る廬は詩仙堂を中心として至樂巢、嘯月樓、其他數室を總稱して凹凸窠と云ふ詩仙堂は中央の一小室にして本朝三十六歌仙に擬し漢晉唐宋の詩仙三十六人を選び狩野探幽に囑して各其像を方版に圖し各

薄暮末吉家を辭して平野の舊蹟を此所彼所案内されて大阪に歸つたのは午後九時であつた。

秘藏の珍什を惜氣もなく拜見を許され、加へて厚遇を賜はりし末吉家の好意に對しては私等の感謝して措かざる所である。尙柏原氏、末吉一郎氏に對しても厚く御禮を申して置きたい。

## 小沼量平

家の警絶を其上に題し四壁に排列して詩仙堂の扁額を掲ぐ故に此の名ありと云ふ今其詩仙と題詩とを擧ぐれば

別昆弟

蘇武（左方第一）

骨肉縁枝葉、結交亦相因、四海皆兄弟、誰爲行路人、況我運枝樹、與子同一身、昔爲鴛與鴛、今爲參與辰、

雜詩

陶潛（右方第一）

結廬在人境、而無車馬喧、問君何能爾、心遠地自偏、采菊東籬下、悠然見南山、山氣日夕佳、飛鳥相與還、

此中有真意、欲辯已忘言、

登池上樓

謝靈運 (左方第二)

初景革緒風、新陽改故陰、池塘生春草、園柳變鳴禽、  
那々傷爾歌、萋々感楚吟、索居易永久、離群難處心、  
持操豈獨古、無悶徵在今、

學劉公幹體

鮑昭 (右方第二)

胡風吹朔雪、千里度龍山、集君瑤臺裡、飛舞兩楹前、  
茲辰自爲美、當避艷陽年、艷陽桃李節、皎潔不成妍、

終南山應制

杜審言 (左方第三)

北斗掛城邊、南山倚殿前、雲標金闕迴、樹杪玉堂懸、  
半嶺通佳氣、中峰繞瑞烟、小臣持獻壽、長此戴高天、

感遇

陳子昂 (右方第三)

聖人不利己、憂濟在元元、黃屋非堯心、瑤臺安可論、

古風

李白 (左方第四)

大雅久不作、吾衰竟誰陳、王風委蔓草、戰國多荆榛、  
龍虎相啖食、兵戈逮狂秦、正聲何微茫、哀怨起騷人、

登岳陽樓

杜甫 (右方第四)

昔聞洞庭水、今上岳陽樓、吳楚東南圻、乾坤日夜浮、  
親朋無一字、老病有孤舟、戎馬關山北、憑軒涕泗流、

終南別業

王維 (左方第五)

中歲頗好道、晚家南山陲、興來每獨往、勝事空自知、  
行列水窮處、坐看雲起時、偶然值林叟、談笑無還期、

歲暮歸南山

孟浩然 (右方第五)

北闕休上書、南山歸敝廬、不才明主棄、多病故人疎、  
白髮催年老、青陽逼歲除、永懷愁不寐、松月夜窓虛、

重陽

高適 (左方第六)

節物驚心兩鬢華、東籬空繞未開花、百年將半仕三已、  
五畝就荒天一涯、豈有白衣來剝啄、亦從烏帽自欹斜、  
眞成獨坐空搔首、門柳蕭々噪暮鴉、

題虢州西樓

岑參 (右方第六)

錯料一生事、蹉跎今白頭、縱橫皆失計、妻子也堪羞、  
明主雖然棄、丹心亦未休、愁來無去處、祇上郡西樓、

山中流泉

儲光義 (左方第七)

山中有流水、借問不知名、映地爲天色、飛空作雨聲、  
轉來深澗滿、分出小池平、恬淡無人見、年々長自清、

長信宮

王昌齡 (右方第七)

金井梧桐秋葉黃、珠簾不捲夜來霜、薰籠玉枕無顏色、  
臥聽南宮清漏長、

寄全椒山中道士

韋應物 (左方第八)

今朝郡齊冷、忽念山中客、湖底東荆榛、歸來煮白石、

欲持一瓢酒、遠慰風雨夕、落葉滿空山、何處尋行迹、

海鹽官舍早春

劉長卿 (右方第八)

小邑滄洲吏、新年白首翁、一官如遠客、萬事極飄蓬、

柳色孤城裏、鶯聲細雨中、羈心早已亂、何事更春風、

拘幽操

韓愈 (左方第九)

目窈窕兮其凝其盲、耳蕭々兮聽不聞聲、朝不日出兮夜

不見月與星、有知無知兮爲死爲生、嗚呼臣罪當誅今天

王聖明、

漁翁

柳宗元 (右方第九)

漁翁夜傍西巖宿、曉汲清湘然楚竹、烟消日出不見人、

欸乃一聲山水綠、迴看天際下中流、巖上無心雲相逐、

立都觀

劉禹錫 (左方第十)

紫陌紅塵拂面來、無人不道看花迴、立都觀裏桃千樹、

盡是劉郎去後栽、

王昭君

白居易 (右方第十)

漢使却回憑寄語、黃金何日贖娥眉、君王若問妾顏色、

莫道不如宮裡時、

雁門大守行

李賀 (左方第十一)

黑雲壓城城欲摧、甲光向日金鱗開、角聲滿天秋色裏、

塞上隴脂凝夜紫、半捲紅旗臨易水、霜重鼓寒聲不起、

報君黃金臺上意、提携玉龍爲君死、

人日立春

盧同 (右方第十一)

春度春歸無限春、今朝方始覺成人、從今剋己應猶及、

顏與梅花俱自新、

早行

杜牧 (左方第十二)

垂鞭信馬行、數里未鷄鳴、林下帶殘夢、葉飛時忽驚、

霜凝孤鶴迴、月曉遠山橫、僮僕休辭慮、時平路復平、

井絡

李商隱 (右方第十二)

井絡天彭一掌中、漫誇天設劍爲峰、陳圖東聚燕江口、

邊柝西懸雪巔松、堪歎故君成杜宇、可能先主是真龍、

楚辭體

寒山 (左方第十三)

有人坐山陘、雲卷兮霞纒、乘芳兮欲寄、路漫兮難征、

心惆悵狐疑、年老已無成、衆嗚呼斯蹇、獨立兮忠貞、

宿東林寺

靈徹 (右方第十三)

天寒猛虎嘯巖穴、林下無人空有月、十年像教今不聞、

焚香獨爲鬼神說、

壽堂

林逋 (左方第十四)

湖上青山對結廬、墳頭秋色亦蕭疎、茂陵他日求遺稿、

猶喜曾無封禪書、

首尾吟

邵雍 (右方第十四)

堯夫非是愛吟詩、雖老精神未耗時、水竹清閑先據了、鶯花富貴又兼之、梧桐月向懷中照、楊柳風來面上吹、被有許多閑棒擁、堯夫非是愛吟詩、

金山寺

梅堯臣 (左方第十五)

吳客獨來後、楚燒歸夕曛、山形無地接、寺界與波分、巢鳩窺窺物、順鷗自作群、老僧忘歲月、石上看江雲、

中秋松江對月

蘇舜欽 (右方第十五)

月晃長江上下同、畫橋橫絕冷光中、雲頭豔豔開金餅、水面沈沈臥彩虹、佛氏解爲銀色界、仙家多住玉華宮、

地雄景勝言不盡、但欲追隨乘曉風、

寄元均

歐陽修 (左方第十六)

由來邊將用儒臣、坐以威名撫漢軍、萬馬不嘶聽號令、諸蕃無事著耕耘、夢回夜帳聞羌笛、詩就高樓對隴雲、莫忘鎮陽遺愛在、北潭桃李正氛氳、

雪後

蘇軾 (右方第十六)

城頭初日始翻鵝、陌上晴泥已沒車、凍合玉樓寒起粟、光搖銀海眩生花、遺蝗入地應千尺、宿麥連雲有幾家、老病自嗟詩力退、空吟水柱憶劉叉、

次韻楊明叔

黃庭堅 (左方第十七)

老作同安守、蹇足信所便、胸中無水鏡、敢當吏郭銓、恨此虛名在、未脫世絆纏、念作白鷗去、江南水如天、

主家十二樓、一身當三千、古來妾薄命、事主不盡年、起舞爲主壽、相送南陽阡、忍着主衣裳、爲人作春妍、有聲當徹天、有淚當徹泉、死者恐無知、妾身長自憐、

妾薄命

陳師道 (右方第十七)

粲々江南萬玉妃、別來幾度見春歸、相逢京洛渾依舊、唯恨淄塵染素衣、

墨梅

陳與義 (左方第十八)

烟雨昏昏二月梅、全家避寇寄城隈、欲尋碧落侍郎去、遽沐青州從事來、令我妻孥爭洗盞、想公伯仲正傳杯、安能鬱々久居此、且傍茶山松逕回、

鄭簡道餉酒

曾幾 (右方第十八)

蘇武、謝靈運、陳子昂、李白之四詩は、何れも其一部を節録せるものなり、

至樂巢は先生の讀書室にして經史を讀み諸子百家を涉獵せし處、嘯月樓は堂之三階にして舊と群書を貯へ四部を列し先生興到れば則ち此の樓に登り欄に凭り月に對して朗吟せし處と云ふ。然して凹凸窠の景勝は庭に瀑流あり澗溪あり近くは洛陽の晚煙を眺め遠くは難波

の城樓を望むべし。先生十境十二景を選びて是を圖せしめ自ら詩を賦して之に題せりと云ふ。今先生の遺墨遺愛品等の二三を擧ぐれば詩仙圖像并序の卷物壹卷。凹凸窠十二景詩并序の卷物壹卷、朱子家訓掛物壹幅、謝二林氏詩并序卷物壹卷、遺愛品には眉公琴、天造几、殘月硯等あり詩集には覆醬集四卷あり京兆尹板倉重宗の需に應じて自ら編せしもの又新編覆醬集十六卷あり。門人石克が編輯して印行せしもの共に世に行はれ手澤本には後漢書三十七卷、瀛奎律髓四十九卷あり。外に林羅山先生の詩仙堂記壹卷、水戸徳川高修公の丈山石子既没百五十年忌之詩卷物壹卷、同徳川景山公の寄詩仙堂詩掛物壹幅、佐藤一齋先生の夢石川丈山并叙と題する詩の大幅壹軸、頼杏坪先生の過詩仙堂有感と題する詩の大幅壹軸、大雅堂の二枚折屏風其他十數種を展觀せり。午後三時堂を辭し舞樂寺村に丈山先生の墓を展し途次金福寺境内に俳聖芭蕉庵の舊址を訪ひ。また與謝蕪村、吳月溪、吳景文、の墓を弔ひ夕六時三十分京都發の列車にて歸阪せり歸來先生の高風清節夢寐の間に往來し高士逸蹤の其の泉石の幽と共に眼前に

髣髴たるを覺ゆ

